

眠りみる子の眉あげて氷る山

田中裕明（『櫻姫譚』）

この秋、宇佐美魚目さんが亡くなった。訃音が届いたとき、夜空を見上げると、それは大きな後の月が上がっていた。92歳だったという。裕明が亡くなったとき、追悼号に「田中裕明さん それにしても早すぎたのでは……」と絞り出すような言葉を添えてたくさん句を引いて下さっていた。

魚目さんを裕明はことのほか慕っていた。こんなエピソードを遺している。

「あるとき、会のあと、魚目さんの席の前に坐ることがあって、最近どんな風に俳句を作っているかと尋ねられました。俳句を作ること、たくさん作ることが楽しくてたまらない時分だったので、そのように答えました。魚目さんは、私の顔から少し視線をはずして、もうじき俳句を作る道がつかなく厳しいものになる、そうってからが正念場だと強く言われました。遠いところを見ている目でした。」
魚目さんは、つかなく厳しい創作の道を、緩むことなく歩み通した作家だったと思う。また、氷の季語がお好きだったと思う。掲句など、そこはかとなくその影響が感じられる作品だ。

男に男らしさ八方氷る木曾 宇佐美魚目